

故浦西和彦関西大学名誉教授の 業績と研究活動

増田 周子

山嘉樹が晩年を過ごした地でもあったので、先生はそこに住んでいた葉山の妻菊枝夫人と知り合い、生涯の研究テーマ葉山嘉樹文学に出会う。そうして、昭和四十一年には、坂下女子高校文藝部機関誌「友樹」第三十八号で「葉山嘉樹特集号」を刊行した。この特集号は、中野重治、小田切秀雄、佐多稻子、平林たい子、久保田正文、寺田透、平野謙らがアンケートに回答を寄せたこともあるて、広く反響を呼んだ。また、同誌で「森田草平特集号」（第四十三号）なども編纂した。

この時期の先生の地道で画期的な研究が故谷沢永一関西大学名誉教授の目にとまり、昭和四十六年には関西大学に専任講師として御着任なさった。着任して二年後の昭和四十八年六月には、初めての単著『葉山嘉樹』（近代文学資料6）を桜楓社より刊行された。この著書は、無署名『葉山嘉樹』をまとめた浦西和彦さん——昭和文学の原点をさぐる——（『朝日新聞』八月二十日）で、「浦西和彦さんは三十一歳、まだ少年の面影

平成二十九年十一月十七日脾臓がんの病魔に侵され、浦西和彦先生は七十六歳でご逝去なさった。関西大学を平成二十四年三月にご退職されてからたつた六年と少しのことで、普段から健康に留意されていた先生の予期せぬ早い訃報に驚愕し、教え子をはじめ先生を慕う人々は、深い悲しみとこの上もない寂しさに打ちひしがれた。先生の死の衝撃は計り知れないものだったのである。さて、今回本誌で、故浦西和彦関西大学名誉教授の追悼特集が編まれることに、先生の学問に接することのできた者一人として深く感謝し、先生を追悼すべく、ご経歴、ご業績を簡単に振り返っていきたい。

昭和十六年に大阪市でお生まれになつた先生は、関西大学第一中学校、高等学校、関西大学へと進まれた。大学卒業後の昭和三十九年からは岐阜県で高等学校の国語教諭をなさつた。大學時代の卒業論文は『源氏物語』であつたが、岐阜県で国語を教えながら日本近現代文学研究にいそしまれていた。岐阜は葉

89

『フェンスレス』オンライン版 第5号(2019/03/20発行)
占領開拓文化研究会 senryokaitaku.com

が残る青年研究者であった。〔略〕プロレタリア文学は、思ひがけない理解者に恵まれたというべきだろう。」などと高く評価された貴重なものであつた。

昭和四十九年に、先生は助教授に昇進し、昭和五十年三月、中野重治、寺田透との鼎談「葉山嘉樹『昭和の文学』」を「群像」誌上で行つた。さらに四月、『葉山嘉樹全集』全六巻が筑摩書房から刊行され、金子洋文、中野重治、寺田透、小田切秀雄と編集委員になられた。こうして先生は着々と葉山嘉樹の研究を進めていくのである。さらに先生は、小林多喜二、徳永直などのご研究を推進し、昭和五十六年四月に、関西大学文学部教授に昇格、翌年の昭和五十七年五月には、『徳永直』（人物書誌大系I）を日外アソシエーツより刊行した。また、昭和六十一年五月には、『日本プロレタリア文学研究』を桜楓社より刊行し、大田洋子、黒島伝治など、多くのプロレタリア文学の研究論文を収載した。寺田透によるオビの推薦文では「浦西和彦氏の調査はあきれる程入念、かつ独特である。（中略）面白く楽しく読める『研究』である。」と評された。先生の、緻密さ、正確さ、几帳面さが滲み出た立派な書である。

その後も、先生はご研究をますます精力的に行い、昭和六十一年三月『日本プロレタリア文学書目』を日外アソシエーツより刊行、同月関西大学より文学博士の学位を授与された。さらには、七月『谷沢永一』（人物書誌大系13）を日外アソシエーツより刊行し、昭和六十二年一月同出版社から『葉山嘉樹』（人

物書誌大系16）を発刊する。平成元年六月には、浅田隆、太田登と共編『奈良近代文学事典』を和泉書院より刊行した。この本が、先生の数多くの事典編纂の最初のお仕事であろう。本書のオビに、井上靖が、推薦文「シリクロード博によつて現代社会における奈良の文化風土の意義が問い合わせられた今、近現代文学を通じて、再び奈良の今日的意義を世に問うべく、本事典を推す。」と記している。また、同月六月児島千波と共に編した『武田麟太郎』（人物書誌大系21）を日外アソシエーツより刊行した。

平成二年十月には、『開高健書誌』（近代文学書誌大系I）を和泉書院より刊行し、平成三年十月、先生は関西大学図書館長に就任された。『開高健書誌』も、かなり評判がよく、無署名

「いま、この人『開高健書誌』を出した浦西和彦さん」（朝日新聞）平成三年二月二十三日付夕刊）や、栗坪良樹「書誌作製といふ無償行為」（文学瞥見）（海燕）平成二年十二月一日）など、多くのメディアによりあげられた。図書館長は、平成九年まで三期務められたが、図書館長としての手腕も、優れており、画期的な数多くの企画を手掛けた。平成四年一月に、『葉山嘉樹――考証と資料――』（国文学研究叢書）を明治書院より刊行

後、七月には、関西大学図書館の企画出版の一環として『関西大学図書館影印叢書』全十巻の刊行を、関西大学国文学科のメンバーとともに開始した。先生は、『葦分船』（平成十年、関西大学出版部）『日本文学報国会大日本言論報国会設立関係書類』（平成十五年、同）の「解題」を手掛けられた。九月には、

関西大学図書館の企画として大丸心斎橋店南館七階会場で開催した「おおさか文藝書画展」で、大阪作家の原稿や大阪画壇の絵画などを展示し、大反響を呼び八千五百人の入場者があった。この会場で、河野多恵子の夫の画家、市川泰による河野多恵子像の絵が飾られたことや、宇野浩二家に代々伝わる、宇野家家系図などが展示されたことも記憶に新しい。

平成四年には『織田作之助文藝事典〈和泉事典シリーズ2〉』も刊行した。本書は、『織田作之助全集』の逸文を含む、隨筆や小説も含んでいたため、オビの推薦文に青山光二が「織田文學が小説本来の面白さに溢れた眞の文学であり、文学のエンセンスの宝庫でもある」と見直されつあるとき、新発見の資料や未発表の事実も収録した、完璧到らざるなき本事典の出現は実に喜ばしく、切に江湖に推す所以である。」と述べ、藤本義一もオビの推薦文で「戦後、焼跡の闇に、大阪の地から放たれた光芒織田作之助の全作品を丹念に追つた労作に、ただ脱帽する」と評した。さらに、メディアにも反響があり、崎『織田作之助文藝事典』の編者——浦西和彦さん——（『読売新聞』平成四年八月十七日付夕刊、大阪版）、彩「すごい『織田作事典』（『産経新聞』平成四年八月十八日付夕刊）などをはじめ、好評された。平成七年からは、明治書院より『昭和文学年表』第一巻から六巻を刊行する。また、同年十一月『田辺聖子書誌』（近代文学書誌大系3）を和泉書院より刊行した。本書の推薦文には、「全体を眺め、細事に拘泥しつづけ、執拗な持久力の持主、そ

れが浦西氏である。田辺聖子と浦西和彦という絶妙なコンビがここに生れたといつてよい。」（書誌学者の「心意氣」I 国民的作家・田辺聖子の広範囲な活動を精査。紅野敏郎）がある。平成十三年十二月には、『現代文学研究の枝折』（近代文学研究叢刊26）を和泉書院から発刊した。本書は、白「社会踏まえて作品評価——浦西和彦さん」（テーブルトーク）（『朝日新聞』平成十四年一月二十九日付夕刊）、浜賀知彦「浦西和彦著『現代文学研究の枝折』（東京南部ニュース）平成十四年二月二十日発行、第三百九十一号）などとりあげられ、話題となつた。続いて平成十四年に号は、半田美永氏と共に編著『紀伊半島近代文学事典 和歌山・三重』を同出版社から刊行した。翌年三月には『河野多恵子文藝事典・書誌』（和泉事典シリーズ）を和泉書院より刊行、同書は五月に社団法人日本図書館協会選定図書に選ばれる。また、本年五月、ネットミュージアム兵庫文学館監修者になつた。平成十六年にもネットミュージアム兵庫文学館「阪神淡路大震災と文学」の監修者として協力をし、同年七月日本近代文学館図書館資料委員会の委員になられた。平成十七年には、日本近代文学会関西支部編『大阪近代文学事典』の編集委員長を務め、翌年八月、和泉書院より同事典を刊行した。本書は、オビの推薦文に田辺聖子による「現代、大阪近辺在住の作家も増え、関西を舞台とする作品も多くなつた。関西で活動される在日作家も多く、近代大阪の文学活動は多彩、活潑となりつつある。」こういう時代に、研究者の方々のご努力により、『大阪近代文

学事典』が刊行されることは、まことに時宜を得たというべく、大阪の近代文学研究の礎ともなり、研究者の方々のよき誘掖となろう。」（『大阪近代文学研究の礎』）があり、その他、重「大阪近代文学事典」（批評と紹介）（毎日新聞 平成十七年六月五日）、大村治郎「大阪の文学見直しへ事典編集」（テーブルトーク）（朝日新聞 平成十七年七月十四日付夕刊）、坪内祐三「石丸梧平を知つてゐるかい」（まぼろしの大坂80）（びあ（関西版） 平成十七年七月二十八日発行 第五百七十四号）などでもとりあげられた。さらに、平成十八年十二月、堀部功夫・増田周子と共に『四国近代文学事典』を和泉書院より刊行。また、本年『大阪近代文学作品事典』を刊行した。本書は、オビに難波利三による推薦文「とにかく東京に偏重しがちな近代文学の潮流を、大阪という偉大な地方に軸足を捉えて見つめ直し、発信しようと試みる。労多いその難事業を成し遂げられた浦西教授を初め関係各位の皆様方に敬意を表すると共に、本書によつて大阪の近代文学が再確認され、新たな脚光を浴びるよう、期待は絶大である。」（『大阪近代文学への期待』）がある。

平成十九年から二十年にかけて、先生は、独立行政法人日本学術振興会より科学研究費委員会専門委員を委嘱された。さらには、平成二十年十月から二十一年にかけて『浦西和彦著述と書誌』全四巻を和泉書院から刊行。そして、平成二十一年四月二十七日『浦西和彦著述と書誌』出版祝賀会が新阪急ホテルで開催された。関西大学の皆様をはじめ、日本近代文学会の方々が発起

人となつて企画し、谷沢永一・河田悌一・玉井敬之・浅田隆・浅野洋・木村一信・山本幾生・広橋研三の祝辞、片桐洋一の乾杯を受けた。八月一日、独立行政法人日本学術振興会より特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員に委嘱され、平成二十三年七月三十一日まで続けられた。また、同年、関西大学名譽教授の称号を授与される。

平成二十三年五月二十一日谷沢永一名譽教授を偲ぶ会が関西大学千里ホールで挙行された。冊子『谷沢永一博士 略年譜・書目』（百十七頁）が、浦西先生獨力で作成され、会場で配布された。その後、先生は平成二十四年三月三十一日まで関西大学に勤められた。実に四十三年間の長きにわたり関西大学で教鞭をとられたのである。関西大学時代には、図書館長をはじめ学部執行部など学内行政の重責を担いながらも、数多くの日本近現代文学・書誌学の研究書をまとめあげられた。その傍ら、関西大学から多数の学士、修士、博士を輩出し、立命館大学や神戸学院大学などの大学院生、韓国の大学院生の博士号の審査にもあたるなど学内外の若手研究者の育成にも尽力された。また、韓国その他の国で学者になられた留学生も育てられ、十分な国際貢献を果たされた。

さて、ここに記した多くの著作集、論文集、事典編纂だけでなく、先生は『葉山喜樹全集』（筑摩書房）『田辺聖子全集』（集英社）『河野多恵子全集』（新潮社）『開高健全集』（集英社）『大田洋子集』（日本図書センター）『本庄陸男全集』（影書房）

などの全集編纂、「解題」執筆、「年譜」「書誌」作成などもなされた。『新・プロレタリア文学精選集』（ゆまに書房）などのシリーズ本の監修などもあり、ご業績は枚挙にいとまがない。これらの数多くの研究により、「芸術・芸能・科学又は学術について尽力された」特に優れた人物のお一人として、平成二十六年には第四十九回大阪市民表彰を受けられた。その後も、先生の研究熱は冷めず、いよいよ盛んとなり、『文化運動年表 明治・大正編』（平成二十七年十二月、三人社）『日本プロレタリア文学史年表事典』（平成二十八年七月、日外アソシエーツ）『文化運動年表 昭和戦前編』（平成二十八年十二月、三人社）などを立て続けに発刊し、倉敷市から委託された薄田泣董の研究プロジェクトにも参加して、『倉敷市薄田泣董死後書簡集 文化人篇』（平成二十八年、八木書店古書出版部）も著した。『温泉文学事典』（平成二十八年十月、和泉書院）も刊行し、同書は、『週刊読書人』（平成二十九年一月十三日）で島村景二に「この事典の項目を、アソト・ランダムにめくつてあるうちに、温泉に浸かっているような安らぎを感じ始める。その秘密はどうやら、作品の「内容」を、ダイジェストで解説している温かな文体にあるようだ。浦西たち二十三名の執筆者の手になる作品ダイジェストは、文体が滑らかで、ほのぼのとする。これが、いかにも温泉らしい雰囲気をかもし出している。」などと好評された。現在も多くの一般市民にも愛読されている事典である。

生前最後の編著書となつた『田辺聖子文学事典』（平成

二十九年、和泉書院）も発刊された。その後遺作となる、『文士の食卓』（平成三十年、中公文庫）なども、刊行されている。こうして先生は、故谷沢永一先生の培つた日本近現代文学・書誌学の学統を継承し、発展させてきたのである。先生の著作は、国会図書館の検索サイトでは、単著書だけで実に一四六冊、関わられた著書は膨大である。まさに研究者、教育者の鏡と言えるだろう。先生の著書は基本図書が多く、若手研究者にとつて必定の書であり、役に立つものである。多くの著作を残されたとはいえ、まだ七十代半ばの若さでのご逝去は、これほどお仕事好きの先生にとっては、まことに無念であつたろうと思われる。我々、日本近代文学研究を志す後進の者達は、浦西和彦先生の偉大な業績を仰ぎつつ研究に励んでいかねばなるまい。

先生は、研究、教育に対しても厳しいが、普段はいつも太陽のようないい顔で若手に接し、学界でも親しまれていた。多くの作家にもその研究は感謝され、例えば開高健から自身の愛用のメモ用紙を貰い、豚の丸焼き付きのフルコースをご馳走になつた思い出などを生前嬉しそうに語つておられた。紅茶と果物が大好きで、学生たちと毎年各地の温泉旅行に行くことを楽しみにしていた素顔の先生のお姿が今でも目に浮かぶ。きっと天国でも、図書館を往復しながら仕事をし、温泉につかってゆつくり癒されているのだろう。

末筆になつたが、先生の生前のご指導、ご鞭撻に感謝し、先

生のご冥福をお祈りし、本稿を終えたい。